

〔第27回学術集会 シンポジウムI〕

26th-27th-28thつながるシンポジウム あたらしい生活を見据え、今できること・すべきこと、今だからできること —ポストコロナ時代の家族看護学にむけて—

東京大学大学院

大阪大学大学院

(座長) 山本 則子 山崎あけみ

このシンポジウムは当初、第26回学術集会より継続して、様々な家族看護モデルを活用した実践の紹介や課題への取り組みについて、テーマ「未来をひらく」から、モデルに関連した新たな挑戦的試みや将来の夢などの議論を予定していた。しかしながら、COVID-19の世界的パンデミックをふまえ、『COVID-19感染症がもたらした患者と家族、そして医療者のおかれた特別な状況』を経験したことから、何を学び、近い未来へどう生かすかを考える場にする事とした。課題があるなかでも様々な挑戦を試みた成果として、小林京子先生（聖路加国際大学）深堀浩樹先生（慶應義塾大学）岡本理恵先生（名古屋市子ども青少年局子育て支援課課長）からご報告頂き、感染症の中で見えてきた家族看護の必要性と可能性について議論を深めることができた。

登壇者の講演中から、会場から多くの質問・コメントがチャット機能により寄せられたことはWEB開催ならではの利点であった。シンポジウム前半は、コロナ禍における家族看護実践について、いま誰もが問いかけたいことが登壇者の報告に対して寄せられた。例えば、深堀氏へ「終末期、感染予防の観点と家族ケアの観点から、面会等どのようにすべきですか」には、単に面会の良し悪しではなく、アクションリストのこの項目が参考になりますといった回答をし、かつリストは、共同研究・実習などで日頃から信頼関係の形成されたネットワークに広めることの重要性が報告された。また岡本氏へ「コロ

ナ禍で、家族機能不全状況（DV／虐待等）は増えたと感じますか」には、「実質数字的に増えたとは思わないが、今まで、家に家族がいない時間に相談していた人が、できていないかもしれない」といった保健師としての現場感覚が伝えられた。同時に、住民を守る対面での活動を技とする保健師ではあるが、例えばすでに母子の支援をオンラインで行っている団体を取り込むなど、できないと言ってばかりでは前に進まないという意識をもち、動いているといった力強い返答がなされた。

後半は、家族看護学としてどのような研究が期待されるかに議論がうつった。感染予防のためのエビデンスは比較的是っきりしているが家族への影響、どのような実践が有効か等は、複雑であり中長期的な視座となる。疫学的データと同時に、事例研究の蓄積も重要であり、取り組みのありように自信が持てて、思い切って話し合える場も求められているなど意見交換がなされた。小林氏からはコロナ禍での困難、できないことに注目するばかりでなく、大学と臨床のニーズを育む工夫、今だからこそ距離を縮める、今こういうことができる、一緒にやりたいといった相互の関係性のあり方についても話が及んだ。

2020年12月現在、COVID-19第3波は収束の気配が見られない。ハイブリッド型開催が予定されている第28回学術集会では、さらなる議論が深まることを期待する。